

まちづくり
一期一会

北沢 猛 きたざわ たける

アーバンデザイナー・東京大学教授・UDCKアーバンデザインセンター長
信州塩尻市生まれ会津喜多方育ち。1977年横浜市入庁、都市デザイン室長を経て、1997年に東京大学。横浜市創造都市構想、喜多方市や田村市などで地域再生を支援。グッドデザイン賞金賞(2006)。



都市の光と アーバンデザインの先達

アーバンデザイナー

北沢
猛

わたしはアーバンデザインを職能として選択して、今年でちょうど30年となった。この仕事は考えた以上に楽しく、多くの人と成し得たことの喜びも大きい。子供の頃からものを創ることに感心はあったが、母親が絵を描き、父親は写真を趣味としその仕事は機械設計、兄は建築設計という環境にも影響された。それでも都市をデザインしようとは思っていなかった。都市への道は大谷幸夫先生の空間構成論の授業によって始まった。複雑体である都市を捉え、空間を統合する原理を見いだす期待が芽生えた。大谷先生の趣町計画にも、西山卯三先生の構想計画にも惹かれた。しかし、目前の都市を再編する職能が分からずに構築家を尋ね歩いたが、建築群設計や開発計画であり日本にはアーバンデザインはないとも思えた。アメリカの公共政策としてのアーバンデザインも始まったばかりで、成果や評価も理解されない時代であった。

ある日大谷先生の部屋を訪れた。濃紺の部屋にいつも静かに佇む先生の姿があった。珍しく東大紛争時代から日本の都市を取り巻く社会状況へと熱の籠った話を聞くことになった。そして飛鳥田一雄市長(後に日本社会党委員長)が率いる革新自治体である横浜市に、都市プランナーの田村明さん(法政大学名誉教授)が企画調整局長として活躍していると聞いた。わたしの強い感心に、その場で田村さんに電話いただき、田村さんもわたしに会うことを約束してくれた。

後日、市役所を訪れ、横浜市の航空写真が掲げられ机の上に地球儀がおかれた局長室で、総合的な都市づくりを自治体が主導する意義を聞いた。自治体こそ都市をデザインする場であると。アーバンデザインチームを率いる岩崎俊介氏(後に国連から筑波大学)との出会いもこの時であった。大きな特注の製図板のある部屋で、都市を変え人間性を回復できるという確信を聞いた。一緒に仕事をした時間は短い、都市には潜在的に魅力があり磨き出すのが仕事と考えるようになったが、田村さんの構造的な改革論や岩崎さんの生活の場としての再生論を、時に思想として理解し時に現実として理解した。それらが今わたしの職能の基本にある。

都市はまだ輝きを失ってはいない。



①金沢シーサイドタウン(基本デザイン・1978)、②都心部再生(開港広場計画・1983)、
③パブリックアート(金沢広場・1991)、④歴史を活かしたまちづくり(ドックヤードガーデン計画・1987)、
⑤郊外地域のまちづくり(長屋門公園+安西家移築・1990)、⑥創造都市構想(BankART NYK・2005)